

もくじ

特集：文化振興の今日的課題

■インタビュー 文化振興の今日的課題 4

三浦朱門・日本芸術文化振興会会長

森 英恵・ファッションデザイナー

堤 清二・セゾンコーポレーション会長

鈴木忠志・劇団SCOT主宰

高階秀爾・東京大学教授

■資料

「文化の時代」に対処する我が国
文化振興の当面の重点方策について

文化政策推進会議 20

- 文化庁だより
- ・平成3年度（第46回）芸術祭の開催計画決定 23
 - ・平成3年度芸術祭祝典「邦楽の宴」 25
 - ・平成3年度芸術祭国際公演
第15回日本民謡まつり
「アジア・太平洋うたとおどりの祭典」 25
 - ・文化庁創作作品募集 26

■ 展覧会紹介

- 特別展 甦る仏たち——文化財保存修復技術展 26

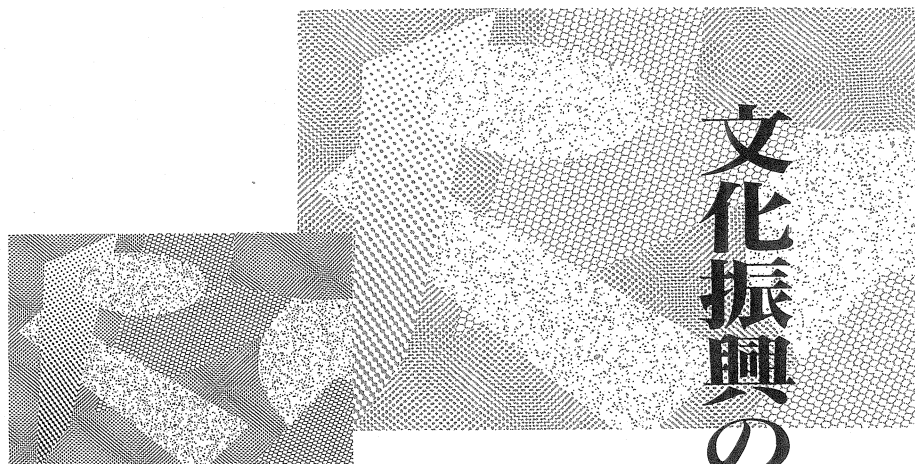
- ・芸術文化振興基金
ニュース27
- ・国立劇場ニュース ...31

表紙写真

- (上)平成2年度芸術祭国際公演
「アジア・太平洋うたとおどりの祭典」
- (中)芸術文化振興基金シンボル
マーク
- (下)紙本金地著色阿国歌舞伎図
一隻（京都国立博物館）

題字デザイン◆桑山弥三郎

文化振興の今日的課題



文化政策推進会議（文化庁長官の私的諮問機関、平成元年八月発足、会長・坂本朝一元NHK会長、委員四十四名）は、文化振興のための総合的な施策の在り方について現在検討中であるが、当面緊急に対応がなされることが望まれる事柄について、七月三十一日、『文化の時代』に対処する我が国文化振興の当面の重点方策について」と題する提言を行った。

また、日本芸術文化振興会（文化庁所管特殊法人、三浦朱門会長）では、このたび、芸術文化振興基金による平成三年度の助成活動を決定した。

これを機会に、文化政策推進会議の委員の方々に、文化振興の今日的課題について、お話を伺いました。

総合的な支援

——まずは会長を務めておられる日本芸術文化振興会の発足、会の在り方、今後の課題などをお聞かせください。

三浦 心の豊かさが叫ばれるようになった今日、芸術や文化への関心や期待が今までになく高まりを持つてきました。そこでわが国の文化振興のために、総合的な支援を考えようじゃないかということのできたのがこの会です。ですからプロに対しては先進的、進歩的な仕事をしている人のために、また物理的困難をもっている人にはその困難な状況を排除すべく、そして一般の国民に対しては、そのような先進的な人たちの仕事を受け入れられるチャンネルをきちんと作っていかう。そういうことが一番大きな仕事ではないかと思っています。ですから大ざっぱに言いまして二つ、一つは伝統的芸術、これは日本にしかないわけですから、ここで減びてしまつたら、

日本芸術文化振興会会長

三浦朱門



あの「鵠」のように本当にもう世界から減びてしまう……だからこれは、その意義について疑問があるうとなかうと、とにかく残しておく。そうすれば後世の人が新しい意義を見つけてくれるかもしれない。もう一つはこれから造る第二国立劇場というものですけれども、これは舞台芸術の中で伝統的でないもの、しかし、現実の日本人の舞台芸術を考える時に無視してはならない存在というものがありませんね。そういうものの場をつくつていかなければならないということです。ですから第一の場合と第二の場合では、当然運用の仕方も異なつてくる。第一の場合には何をやるべきかということが非常にはつきりしているけれど、第二の場合は何をいかにということに問題がある。芸術文化振興会は直接やるのではなくて、間にいくつかのクッションというのか、二つ三つ間接的なものを置いて、国民が、あるいはその世界に従事している専門家が「これはいいものなんだ」と表現できるようなシステムをつくつていかななくてはならないと思います。

——芸術文化振興基金による助成についてはいかがでしょうか。

三浦 例えばオペラがいい例ですけれども、よその国では国がたいへんなお金を出しているつていいですね。ドイツの小さな国々、昔

聞き手・高田都耶子



の伯爵領だの侯爵領だのいうところにも一応のオペラハウスがあるところが多くあります。ですがそれは、かつて領主たちが自分の権力を誇示するために劇場を造つてその運営を自分でやり、イタリヤから芸術家呼んできて「こういうものが見られるのも俺のおかげであるぞよ」とやつたわけでしょう。それは芸術のスポンサーになると同時に、国民に対しても良い王様であることの象徴だったんじゃないでしょうか。けれど、王様がいなくなつた時にそれをだれがやるかという、国でもいいんですが、国ですとやれることが限定されると思うんです。その時の政府の方針を批判するような芸術を国が直接支援なんかしませんよ。そういうことを考えた時、やはりワンクッションおいたほうがいいわけです。例えば教育に教育委員会があるように、芸術の

特集：文化振興の今日的課題

支援活動団体は一步国から離れてあるのいいのではない。それが芸術文化振興会のやる芸術分野での援助だと思ふんです。プロに対する援助もあれば、アマチュアへの支援もあり、芸術を愛好しようとする人たちの保護、支援もあるといったように、色々な面を持つことになります。

——助成金を出すにあたっての審査はどういったものなのでしょうか。

三浦 会から任命された専門委員会が部門別でありまして、できるだけ偏りのないように、それぞれ専門の領域で審査しています。実際問題、芸術活動では、「しこみ」の段階でもかなりお金がかかりますから、たとえ来年度の仕事でも、企画がいいものであれば準備段階でも援助をしようということも決めています。助成の決定は、最終的に総会で審議経過



式のやり方だけを使うのではなく、その土地にあるその土地の技術も復元に對する考え方を取り込んでほしい。彼らの参考になる技術や考え方が提出できるかもしれないし、そのための準備はしてもいいと思います。ただし国際交流基金との存在の違いといったものを打ち出さなくてはなりません。

遺跡の現地公開と博物館

——それでは国内における歴史的な建造物、絵画、彫刻などの保存や修復、あるいはそれらを公開展示するような施設の設備についてのお考えはどうでしょうか。

三浦 近ごろでは遺跡の復元、またそれらの公開に對する考え方が変わってきましたね。発掘されたもの、復元されたものを大きな博物館に収納して公開するというやり方から、現地で公開するといった考え方に変わってきました。いまから四十年くらい前なら、全部国立博物館に集めてガラスケースの中で展示したでしょうが、これからは例えば吉野ケ里遺跡から超国宝級のものが出てくるともね、それがあつた状態のままに、それが壊れないような形で保護をして公開する……そんなふうになるだろうと思ひますね。

報告と結果報告をして了承を得ています。

——助成金は団体、個人を問わず支払われるのですか。

三浦 良い企画、優れた作品であれば団体、個人は問いません。

——芸術文化振興基金は日本国内のものが対象なのでしょうか。

三浦 国外の場合には国際交流基金がありま

海外への文化的貢献

——日本ができる海外への文化的貢献にはどんなものがありますでしょうか。

三浦 それが貢献というものになるかどうか分かりませんが、日本のためになるなら、つまり、直接の目的が日本のことなら、色々やってみたらどうかと思ひていることもありま

——先生もその方が好ましいと思ひれますか。

三浦 思ひますね。ただし、そういうことをしますと、日本の古代史を勉強しようとする時に、稲荷山に行ったり、鳥取へ行ったり、奈良に行ったりと大変です。ですから、博物館でそういうことの情報が全部集められる、得られる、そんなシステムになつてく

洒落た社会貢献

——さて昨今わが国でも、企業の社会貢献が言われるようになりましたが、最後に「企業メセナ」についてのお考えをお聞かせください。

三浦 宣伝というのがありますね。宣伝は「これ買ってください。あるといひですよ。便利ですよ」というものです。一方PRは「わた

う。文楽の関係者にもファンの人たちにも非常に参考になり興味にもなり、おもしろいのではないのでしょうか。

——一緒に新しい舞台を創るのですか。

三浦 いえ、そういうことではなくて、一つの公演で文楽があり東アジアの人形劇もあるという会をもよおすといったような。それは日本の文楽のためにするんだけど、しかし結果的には日本に来てもらつて上演した人たちにも「日本には文楽という素晴らしい芸術があるのか」と刺激を受けて帰つてもらえるのではないかと。両者にとつて得るものがあるでしょうし、そんなことなどやってみるのもいいんじゃないかと思ひますよ。

——ところで海外の遺跡の修復や保存の手伝いを日本がすることについて、どんなお考えをお持ちでしょうか。

三浦 過去の歴史の中で日本はアジアの影響を受けて、さまざまな建築、絵画、彫刻などを作つてきたわけで、そんなことから考えても、それらの材質についても、また復元や保存の技術においても、アジアのものについては欧米より日本のほうが、知り得ているのではないかと。芸術文化振興基金の助成金を出すかどうかは別にして、アジア諸国に役立つような歴史的遺産の保存や研究の手助けはなくてはならないでしょう。その時には、日本

客が一致している時、人はそれを承認するのではない。例えば建築会社が日本の伝統的古代建築を保護するとか、その技術を使う仕事に助成金を出すなんていいではありませんか。ほかには、お酒の会社がいろんなシンポジウムをやつて、そのあとの懇親会でビールを無制限に寄付するなんていうのもね。というのも元々シンポジウムというのは古代ギリシャの「饗宴」が語源とともに飲むこと、酒盛りをするってことなんです。となればお酒の会社がいろんなシンポジウムの主催をすることは悪くないし、ショーをするのも全然不思議なことじゃない。企業が自分の会社の仕事の延長線上にあることを盛り上げることは、企業のためになるだけでなく、日本一般の役に立ちますし。そして企業の利益の一部を国民に還元しようという形で仕事もありますね。テレビ番組を提供してもコーシャルを流さないという、そんな洒落た社会貢献というのがあつてもいいんじゃないかと思ひますか。

特集：文化振興の今日的課題

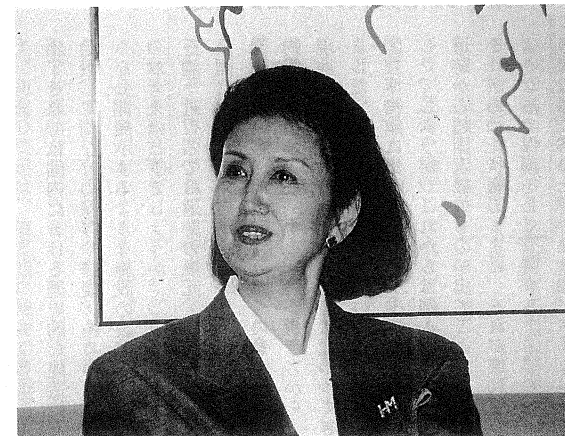
務められておられますが、そのお立場からご意見をうかがわせてください。

森 今年の七月の会議での七つの提言について思いましたのは、もちろん確かに正しいことですが、改めて書類となったものを読んでも、あまりに普遍的すぎるような気がしました。当然のことながら日本の伝統文化は大事ですし、大切にしなければなりませんけれども、それを今の時代に分かりやすく表現することが重要だと思えます。

—— 分かりやすい表現で日本を見せていくというのでしょうか。

森 国際交流が盛んになった今、日本のものを輸出していかなくてはならないというのは確かですが、そうした時にすぐ歌舞伎とか、生け花だといったふうになってしまふのがどうでしょう。もちろんそれらには、日本の精神文化が息づいていて、素晴らしいものです。私もそういうものは大好きですし、日本人として誇りに思っています。でも外国の人たちにとっては、珍しいけれど分かりやすいものではないですね。エキゾチックで変わっている、と受け取られがちでしょう。何かもっと共通の言葉でしゃべれる、そんな交流が目指されるべきではないですか。

—— 振興会による助成金についてお考えはございますか。



ファッションデザイナー

森 英恵

アイデンティティとしての文化

—— 森先生はファッションという仕事を通して社会に貢献なさっておられますが……。

森 幼い頃からいろいろと作ったりすること、とても好きでした。私がしておりますファッションという仕事は、「着る」という人間の暮らしに密着したもので、つまり生活文化に属します。ですからそこから発展して、一つのライフスタイルとでもいうんでしょうか、いろんな分野にわたって暮らしというものが、楽しかったり、おもしろかったり、豊かに感じられるようにと、それを目的にしているんです。

—— お子さまはお二人でしたでしょうか。

森 はい。長男は高校からアメリカに、次男は中学二年からスイスに留学いたしましたが、外国に行つて外から日本を見ますとね、日本のいいところがたくさん見えるようです。今の若い人たちは、日本の伝統的なものに対しては、わりあい興味が無いようですが、外



森 日本では芸術文化の援助において集団への助成はあっても、個人への助成が行われることが少ないのです。個人への援助が増えることで、小澤征爾さんや内田光子さんのような人をもっともつと世界に送り出してほしいですね。

美しく生きることが豊かな暮らし

—— さきほどの「時代とともに国際交流のやり方も変わっていかねばいけない」ということをもう少し詳しくお話してください。

森 マスメディアが発達した今日では、湾岸戦争もソビエトのクーデターも世界中が一緒に見られます。そういう時代になった今、単に「めずらしい」とか「変わった」とかいうことではなく、「なるほど」とか「我々も手にとれるんじゃないか」って思ってもらえるように、噛み砕いて諸外国に見せていくことが重要だと思います。

その点ファッションというのは、本当に分かりやすいんです。去年はモスクワやハンガ

国で暮らすということになれば、おのずと日本を意識せざるを得ない。外国にあって、自分たちが日本人であること、その違いをきちっと出せること、それが私たちの「個性」ではないかと思うのです。

—— 海外から日本を見ることで、日本について考える機会ができるわけですね。

森 海外で勉強したり、暮らしたり、仕事したりしている人は、それぞれが日本の代表なんですよ。自分だけじゃなく、「日本」を背負って生活することになるんです。

—— ということは、真の国際人になることは、まず自国の文化や伝統をしつかり身につけるということでしょうか。

森 そうですね。国籍不明の人間になつてしまふのが、一番魅力ないですもの。

私は外国で長い間仕事をしてきましたが、一番最初アメリカで仕事をしはじめた頃は、国際的な場で日本生まれのデザイナーが競争していくにあたって、いったい自分のアイデンティティはどういうことなのかしら、とずいぶん考えました。

私が日本人であること、女であること、そして日本と外国、西洋との違い、それがまさしく「個性」なのですが、その頃はそんなことをいろいろと考えぬきました。

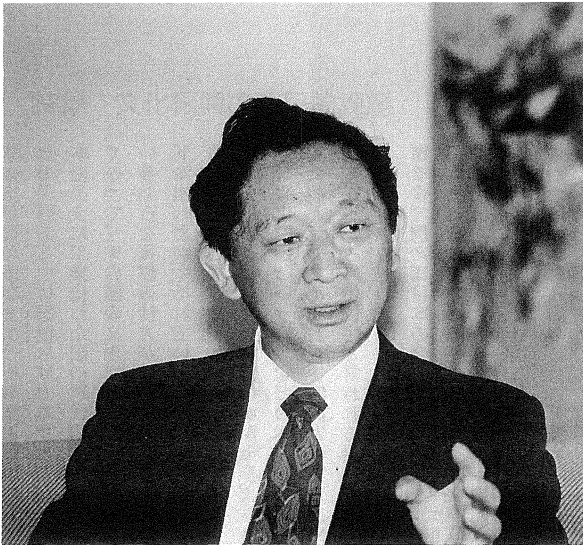
—— さて、先生は文化政策推進会議で委員を

リーでもショーをさせていただきましたが、向こうの方たちが涙をうかべて喜んでくださいました。

国境を越えて人と人とがコミュニケーションがとれるって、素晴らしいことだと思えます。ですがそれに必要な表現力、それが日本人には乏しいんですよ。私などもアメリカで仕事をしはじめた当初は言葉がでなくて苦労しました。ファッションは日頃身につけたり、見たりするものだから分かりやすいものですが、それでも何かひとこと気の利いた説明をそこに付けたい、そうすればもっと分かりやすくなるのにと、本当にそういうことを感じてきました。お互いに理解しあえる力を付けていって街レベルで話し合いができるようになったら、とても素敵だと思います。

聞き手・高田都耶子





セゾンコーポレーション会長

堤 清二

その理由としては、一つにデスクコミュニケーションの問題があります。日本側からすれば十分に意見を言ったつもりなんですけれども、それが抽象的あるいは間接的、比喩的なことが多くて、向う側にはそれが届いていない。もう一つは一部の人の本当に哲学もなんにもなく、儲かればいいじゃないか、というエコノミックアニマル的な低俗な思想です。この二つの理由から、日本についての不可解さが生まれていると思います。

提言は冒頭で、国際的に経済をはじめ、各種の摩擦が深刻化していることを指摘した上で、これを乗り越えて、文化を通じた国際貢献を図るよう強調しています。まずこの点についてご意見をお聞かせください。

堤 日本が経済的に非常に強い国になりましたので、諸外国の間で、日本はいつたいたんな国なんだろう、という関心が高まったのは確かです。しかし、政財界の人たちと会ってみても日本の姿がよくみえない。目も鼻も口もないのつべらぼうで、経済力だけがどんどんと押し寄せてくる。そういう不気味な印象を与えてしまっていることは、残念ながら事実のようです。

——豊かな暮らし、ゆとりといったことを考えます時、海外では企業の社会貢献がずいぶん行われているようですが。ハナエ・モリグループとして社会に貢献、還元なさっておりますか。



聞き手・徳武 靖

そこで、日本の文化をもっとわかっただろう、知らせる努力が日本側で足りなかったんじゃないか、というふうな反省が起こっておりまして、それが今度の提言にも出ていていると思うんです。

もう一つ、文化の面での国際貢献ということになりますと、それぞれの国の文化の問題への協力という要素が出てまいります。例えばインドネシアの仏教遺跡ボロブドールの修復には、日本の政府も財界もかなり協力をし、今は完成しております。しかし、こういう貢献はまだ極めて数が少ない。ある国に経済が進出する場合には、経済ばかりではなく、学術交流も文化交流もいっしょになって、各国社会と全体的な関係をもつという努力が欠けておりまして。

相手の国の需要に応じた貢献の仕方を考え

か。

——その時に必要になってくるのは何でしょうか。

森 やはり一番問題なのは、人間だと思えますよ。ということは人間の教育ということで。子どもはもちろん、学生も、社会人も年をとってリタイアしている人たちも、つまり生涯学習ということではないですか。文部省も力を入れていますが、これからどんなふう

に指導していくかという正念場です。

——ところで今、日本人が世界の中にあつて意識すべきことはどんなことでしょうか。

森 そうですね、地球というひとつの環境の中で人間がどう生きてゆくのか、日本人としてどうあるべきかなど、地球サイズで物事を推し量っていく時期が来たのではないでしようか。

それからね、身近なものに範囲をぎゅっとせばめますが、例えばハナエ・モリのビルのある表参道など、歩行者天国の翌日なんか植込みの中にビンだの缶だの紙くずだのが、平気でいっぱい捨てられているんですよ。近頃の日本人の道徳心はどうしちゃったんでしようか。

——それでは国際交流どころじゃないですね。そういうことがきちつと徹底されなくては。森 そうなんです。そしてコミュニケーション

利益の社会還元に 課税の免除を

——豊かな暮らし、ゆとりといったことを考えます時、海外では企業の社会貢献がずいぶん行われているようですが。ハナエ・モリグループとして社会に貢献、還元なさっておりますか。

森 デザインを勉強している若い人たちに見ていただきたいと思ひまして、私たちがなくてはできないことを思つて一生懸命やっておりますが、毎年赤字なんです。利益を社会に還元しようとする時の課税の免除といったものなどを、至急ぜひ検討していただきたいものだと思っております。

れることなどをお聞かせください。

森 今朝もロサンゼルスからフアクシミリをいただいたところですが、「九月にロサンゼルスオペラハウスのオーピングでマダム・パタフライをするから木綿のハンカチーフを四百枚寄付してほしい。」というものでした。私は蝶をよくモチーフに用いていますので、マダム・パタフライと聞いてぱっと思いついたのがハナエ・モリだったそう。オーピングはチャリティーなので「高い切符を買ってくれた人たちにハンカチのお土産をあげたいのだが」ということでした。他にもワシントンにある「女だけの美術館」のオーピングにもスカーフを特別にデザインをして寄付いたしましたし、こういうお手伝いは小さなことですがいふんとさせていただいています。

——毎年、夏にハナエ・モリのビル内のホールで展覧会などの催しをなさっているそうですが……。

森 デザインを勉強している若い人たちに見ていただきたいと思ひまして、私たちがなくてはできないことを思つて一生懸命やっておりますが、毎年赤字なんです。利益を社会に還元しようとする時の課税の免除といったものなどを、至急ぜひ検討していただきたいものだと思っております。

ていく必要があります。その国の伝統的な文化の保護あるいは振興に協力をするとか、日本のように工業化した国の現代的芸術をもつていて、その国の文化に刺激を与えるとか、いろいろな貢献の仕方があります。ただ何億ドル出したからそれでいい、というものではない、決まてないと思うんです。

——文化摩擦は大きな問題ですが……

堤 文化摩擦という概念をどのレベルで区切るかによりますけれども。無反省に文化を出してゆくと、文化侵略と言われる場合もあります。しかし別の意味の文化摩擦も大きな問題です。例えば日本の会社が工場をつくり、日本人はそこでいっしょけんめいに働き、残業して、日曜日は疲れてアパートで寝ている、教会にも行かない。「あの人は信仰がないのか」といわれ、ついには「悪魔かよその星から移り住んだ人ではないだろうか」となってしまう。そういうことから起こってくる摩擦は非常に大きいと思いますね。

なぜそうなるかといいますと、日本の中にはみんな日本語をしゃべり、髪の毛目の色もたいてい黒く、単一の状態が多いものですから。本当はそうじゃないんですけれども。日本国内での習慣がそのまま、外国でも通用すると浅はかに思い込む。日本人の無知から起こる摩擦が非常に多いと思います。

創造性や美的な感性に重点を

す。メセナ活動が成り立つだけの広範な条件は、まだできていないのではないかと。したがって、今回の提言は意味のあることだと思います。

——提言では、創造性や美的な感性にも価値を見いだす社会への変革を力説していますが、これをどう受け止めるべきでしょうか。

堤 クリエイティブな力、美を感じる心が初等教育からカットされてしまいました。恐るべきことです。日本の教育体系に重大な欠落があると思います。ことにクリエイティブな能力を養成する要素は、過度の受験競争でほとんどけずられていきます。もとをたどれば、明治の教育システムにまでいつちやいますけれども、とにかく一流大学に入學して一流企業に入る、それ以外の人生の幸福が考えられないということになりましたから、サイボーグみたいな秀才がどんどん出てきた。音楽だとか美術だとかの時間を増やそうとすると、PTAから「そんなことやつていて一流の大学に入れなかつたら、責任とつてくれませんか」と文句が出る。情操教育には豊かな表現手段が必要なので、漢字を増やそうと

その点で、日本はアメリカと似ています。

アメリカは多民族国家ですが、理想主義の国ですから、アメリカの哲学は世界に通用すると思ひ込んで、文化摩擦を起こす。ただ、アメリカはたいへん強い国で、それだけの対価を払っておりますから、まだ認められるけれども、日本は対価を払っていないで摩擦を起こすのだから、ジャパンバッシングにつながっていくのだと思いますね。

芸術文化団体もメセナへの主張を

——話を移らせていただきます。提言では企業など民間による芸術文化活動への支援を重視していますが、メセナ活動について。

堤 まずかしい問題です。企業メセナ活動では、継続性ということが絶対に必要です。その点でとても心配な場合があります。企業が「今期はたいへん利益が出たので、何かないか」ということでメセナ活動が展開しますと、経済はよかつたり悪かつたりするものですが、翌年にはばたつと支援がないようなことになりかねません。芸術文化活動は継続的に積み上げられていくものであり、短期で打ち切られると支援を受ける側の芸術文化団体は非常に迷惑します。

すると、「教育労働者の労働過重を促進する反動的な政策」と抗議の葉書が舞い込む。人間のそれぞれの可能性を開花させるべきはずの民主主義の制度が形骸化し、クリエイティブな力が極端に弱くなつてしまいました。そういう中でなお、日本はすてたもんじやないと思ふような優れた人が出てきていますが、たいてい落ちこぼれた人から出ているんですね。ですから、私は「もう一流大学の卒業生は採用するのをやめよう」と言っているんですがね。自分の頭で、オリジナリティーのあるものの判断、理解の仕方ができるかどうかです。企業などが採用するに当たって、こういうことに重点をおいて考えるようにしなくてはいいと思います。

たぐやんの民間の財団を

——文化予算の大幅増額が重大な課題ですが、最後に芸術文化振興基金についてご意見をうかがいたいと思います。

堤 うれしいことに芸術文化振興基金ができて国際交流基金と車が二つそろいました。文化庁、外務省という区分けではなく、国全体の問題として大きなプラスです。国際交流基金では援助対象にならなかったものが大幅に

もう一つは文化や芸術についての本質的な理解の上になつたメセナでないといけないということです。テレビのスポンサーと同じようにメセナが考えられては、たいへん困ると思います。応援している芝居で、自分の会社の製品を何回舞台に出すかということになりますと、それは宣伝販売促進活動です。メセナと宣伝販売促進活動とは本質的に違う、ということがどうも分かつていない企業が、多い。もう一つ、メセナをやる場合に、「冠さんだから、観客はどれくらい集まるんだ」といつて、片方は五万人、片方は三千人だと、「じゃあ、五万人の方に応援する」となる。それは間違っています。商業ベースで成り立つ芸術文化活動には、メセナは必要ありません。今はポピュラーではないけれども、これを維持していくことによって日本の芸術文化が将来豊かになっていくものを支援する。そういう姿勢がメセナです。

メセナ活動の本質をご理解いただかないと、メセナブームが終わつてみたら企業への反感だけが残つた」ということになつてしまいます。もつとも、芸術文化団体の側ももつとたくましくなつて、企業にどんなお金をださせて、自分たちのやりたい活動をするように主張なさつたらいい。そこに欠ける点があると思います。両方に反省すべき点があります。

援助対象になつてくるわけですので、これと相互補充の関係ができるんじゃないかなと期待しております。

芸術文化振興基金は政府出資五百億と百億円を目標とする民間の支援金で、その利息で助成するわけですから、基金をもつと大きく増やしていただきたい。そして周辺に民間の財団がたくさん出来るのが望まれます。この基金はパブリックな性格をもっておりますので、公平にという原則は働かざるを得ません。基金でやりにくいのは民間の財団が受け持つ。「伝統芸術のここだけは自分の財団でやりたい」「今は無名だけれども、将来必ず大きなものになるから支援する」と民間の財団が補充するような努力をする。官民が協力体制をつくるのがとても大事です。

猫も杓子も一流大学、一流企業でサイボーグがでてくるシステムで、仏像などを修理する専門家がどんどん高齢化してあぶない状態でしたが、芸術文化振興基金が生まれて、間一髪セーフという感じです。

東京から利賀村へ

鈴木先生の御活躍は国内だけでなく海外でも高い評価を受けていらつしやいます。国際的に活躍なさるのに、なぜ本拠地を東京を離れて富山県利賀村へ移されたのか、そんなところからお話いただけますか。

鈴木 私は外国の大学で教え、また外国の芸術祭や劇団を訪れ、それらと交流をしてきましたが、総体的に比較してみても、日本の芸術団体はあまりにも東京への一極集中になりすぎている。そうなっているのは芸術団体だけではなく、人口から行政の機関、今やすべてのものがそうです。もちろんそれゆえに、秩序が安定した、経済的繁栄がもたらされた、情報システムの流れが円滑になったというように、日本の社会が良くなったこともたくさんあります。しかし逆に私のかかわる芸術、演劇の分野では一極集中によるマイナス面が非常に出てきている。顕著な例が精神文化の面です。その結果として、精神文化の領域での国際的な競争力とカリダースhipをとる力などが弱ってしまいました。演劇のような芸術活動にはマンツーマンといったような個対個の人間関係が必要なので、機械的にものを処理していくのではなく、一人一人の人間

聞き手・高田都耶子



果、本拠地を移したのです。

——利賀村に移られたのが一九七六年、主宰なさっていた早稲田小劇場（一九六六年設立）も八八年には「劇団SCOT」（鈴木カンパニー・オブ・トガ）と改称なさったのです。

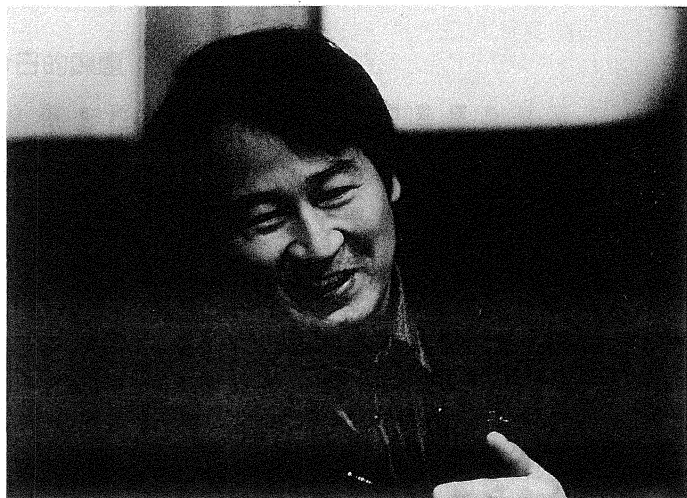
鈴木 そうです。利賀村を選んだのは首都圏に近い中間都市です。すぐに東京と同じようになるだろうからと、一番対極にある過疎地で実験してみようと思ったのです。

——移られてからはいかがでしたでしょうか。

鈴木 現在、利賀村の稽古場には世界十二ヶ国から六十人が訓練にきています。私の劇団の舞台が国際的に注目をあつめるようになったのは、やはりここでの集中した鍛練の成果でしょうね。

——日本初の国際演劇祭となった「利賀フェスティバル」も毎年夏に開催なさつていらつしやるのです。

鈴木 ええ、今年がちょうど十周年でした。



劇団SCOT主宰

鈴木忠志

利賀フェスティバルは私のここでの活動のイベント部分で、毎夏二週間、世界各国からいろんな劇団や演出家を呼びます。今までで十七ヶ国、七十七グループが参加してくれました。演劇祭をはじめたのは、国際交流だけでなく日本の中に国際化した場所をつくる必要があると思ったからです。そういった場所をつくっておかないと、日本人の芸術意識は変わっていかないと。諸外国ですと、楽団にしても劇団にしても一つの民族だけで芸術集団が成り立っているなんてないじゃないですか。多国籍による集団です。同じ民族だけで劇団を構成しているのは、日本だけです。私の劇団にはアメリカ人もいますが、異質の民族、国籍を持った人たちが持続的に共同作業のできる場所を作りだすことを目指しているのですが、その活動の具体的な現れがフェスティバルだと思っています。

人間振興が地域振興

——行政からの援助はあるのですか。

鈴木 富山県や利賀村から、運営費や施設に關して援助していただいています。それから、今までの考えとは別にもう一つ、利賀村の過疎対策にも貢献できればという気持ちもありました。ここは景色も良く、本当に素晴らし

い所で、合掌造りのような文化財もある……なのにそういうものが生かされないまま、若者たちも都会に出ていき、村は高齢化してゆく。また自然環境が厳しいからと離村していく人も多い。でも私としてはこういう土地の見直しというか、土地の持つ可能性を示していきたいと願っているんです。そしてそのお手伝いが、演劇活動を通じて出来るのなら、何よりのことです。芸術のためだけに芸術活動があるのではなく、芸術によって人間の素晴らしさを、民族を越えて人間同志が協調し連帯し感動しようということを実際に示すためにこそ、芸術活動はあるはず。もし地域の活性化のために我々芸術家が何か貢献するとしても、芸術家はそれを「地域振興」と言うべきではありません。それは政治家、行政家が言うことで、我々はあくまで「人間振興」をしているのです。

——ところで先生は茨城県の水戸市にできました「水戸芸術館ACM劇場」の芸術監督にも就任されましたが。

鈴木 こちらは利賀とは違った思いがありました。水戸市はもう人口三十万人に近い都市で、財政基盤も九百何十億とあり、運営費も年間九億何千万円とでできます。水戸では立ち遅れていると思われる日本の文化行政システムを変えてみたいと思いました。水戸では

市の予算の1%を運営費として支出してもらうことにし、運営は芸術家に任せていただく。館長も芸術家、人事権も予算の執行権も芸術家、というシステムを試みていたのだ。で、それは今後の自治体の文化行政のありべき姿を模索した実験だと考えているんです。水戸でのケースが先生の説いておられる「人材の育成」ということにもつながっているのでしょうか。

鈴木 日本では空間とか時間を管理し使用する権限や、経済的な余裕、そういったものが演劇人に保証されていないことがありますね。外国では若い演出家でも劇場を自由に使える権限をもっていますから、自分たちで演劇の基盤を拡げるためにいろんなことを立案、計画する。たとえば一般の人たちに劇場や稽古を公開できるんです。一方日本の場合には演劇界にそういう助成というか、経済的保証もなくて、たとえば建物にしても自治体や公共団体が管理、運営している。ということでは、芸術家の人材養成にしても、観客の教育にしても難しいのです。

地域でがんばっている人に助成を

——助成ということができましたが、平成二年

から始められた芸術文化振興基金による助成金についてのお考えなどありましたら。

鈴木 日本のお金に乏しい芸術家を援助することだけが目的ではなく、もう少し演劇というものを社会生活の中で身近なものにしたい。ために使ってほしいと思うんです。芸術や芸術活動の人間社会の中での大切さ、おもしろさ。それから職業は違っても、人間の悲しみとか怒りとか生きる時の苦しさ、喜びというものとは共通ですよ。それは民族、国家を越えてもそうだと思います。そんなことを芸術家は示しているのです。人間とは何かということ。そこを、そういう考え方、そういう芸術がいかに社会に重要かということをも身近に注目させるための助成が必要だと思います。東京の団体だけに助成したり、単に貧しいから助成するのではなく、もっと地方でがんばっている人や演劇を通じて社会的な活動意識をしっかりと持っている人を応援して欲しい。人を見極めて助成することが課題になりますね。

鈴木 私は芸術への助成というのは、本来は団体でなく個人にすべきだと思っています。そして芸術家にお金を出したら、その芸術家が日本で活動しようが外国で活動しようがかわらないというように考えるべきなんです。富山の税金を使う以上富山の人でなければ出

せないなどというのではなく、富山に出て来てもらえて、それで観客が喜び精神的に豊かになるなら、富山が九州の劇団に助成したつていいじゃないか、というのが私の考えです。芸術家は地域を越えるから芸術家なんです。

——芸術家には国境がない。

鈴木 精神というもののわざわざ国境をつけるのはおかしいんで、例えばアメリカ人であっても日本のために何かしてくるのなら、応援してもいいと思いませんか。

——そういう助成の仕方が海外では……。

鈴木 あります。私なんかはそれで助けられました。フランス政府やアメリカ政府からの補助金をもらって活動してきたのですから。日本では日本のお金は日本人に使うべきだという考えが優先するようですが、たとえばフランスではフランス人がこのアメリカ人によって人間的に豊かになれるなら、そのためにはアメリカ人に助成したっていいじゃないかって考えもあるんです。

アジアの芸術家の 応援を

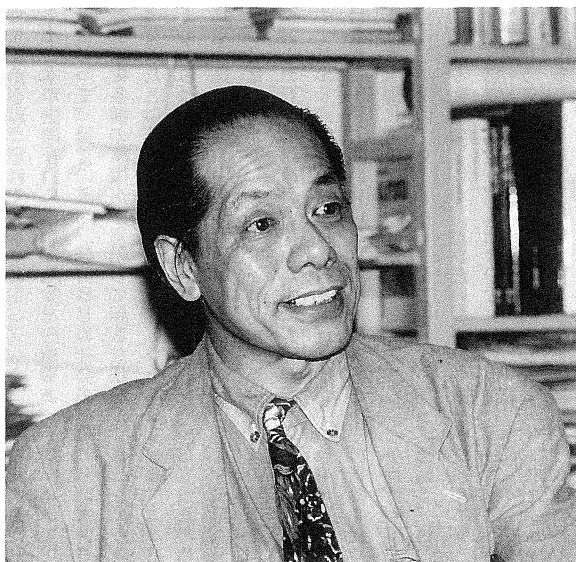
——最後に日本の国際貢献について伺いたいです。

鈴木 先程お話ししたように、フランス人

たちは「自分たちがこの人を世界に売り出した」ということを誇りにしている。だからもし日本にお金があるのなら、アジアの優秀だけれど貧しい芸術家たちを日本に呼んであげたい。日本人はお金も持っているけれど、積極的に外国の人を評価して日本に呼んできて、日本人もそれを楽しんで、日本で成長して外国へ出ていくことをしたことがないんです。すぐ向こうの団体に寄附しちゃおう式や、欧米で認められた人を呼んでくる、今までのやり方から脱皮した、そんな援助の仕方が国際貢献になると思います。

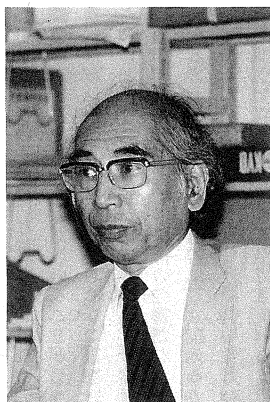
——それは意識の改革が必要になってきますね。

鈴木 私は過激なことを言っているのかもしれませんが、才能ある芸術家を日本に招いて応援することで、芸術を通じて世界の精神文化に貢献することになる。それが我々の誇りにもなり、豊かさにもつながっていく。地域にとらわれない援助、そんなふうにお金を使えるようになった時にこそ、本当の「文化基金」と言えるのではないのでしょうか。



東京大学教授

高階秀爾



聞き手・楠山三香男

「文化の時代」とは

——提言の標題には「文化の時代」に対処する……とあるのですが、今、なぜ「文化の時代」なのでしょう。まず、そのあたりからうかがいます。

高階 戦争に負けた日本として、何はともあれ、食べられる、まともに生活できるようにならなければ、ということで経済の復興に力を入れてきました。一方、戦時中の精神主義の反動として、科学が強調されるようになり、それはまた、技術の進歩を促し、経済が発展していく原動力となった。こうして、生活の安定はもたらされ、世界中から経済大国と見られるようになりましたが、本当の意味で、豊かなさの実感がない。その立場になって、気づかされたのが「文化の時代」ということでしょう。

「文化」といえば、人間の営みすべてを含むことにもなりますが、ここでは物質的でない、ということ、つまり「こころ」とか、「生き方」にかかわる問題ととらえてのことです。

——日本が戦後すぐに掲げた目標は「文化国家」でしたが……。

高階 それまでが軍国主義にひたすら傾いていた、という反省から、唱えられた目標だったのでしょうか。でも「食うや食わず」の時代

でしたからね。忘れてしまった……。

——日本が国際社会に大きな地歩を占めるようになって、提言の言う「経済はじめ社会の各方面に各種の摩擦が深刻化している」状況になったというのですが、「摩擦」をどうとらえていらっしゃるのか。

高階 長い歴史の中で、世界中それぞれに独自の文化を持って、今日まできました。その違いをお互いに認め合うことが、まず必要です。しかし違いばかり気にかけると、摩擦が目立ちます。人間の文化としては、普遍的なことも大いにある、という点にも着目していくことが大切です。

異なる文化のどこが、どう違い、また共通なのかを究めていく。人間なので、文化ということでは、お互いにかかわりがないはずはありません。

日本文化の積極的な発信を

——お話は、問題の基本として忘れてはならないことだと考えます。そこで、文化を通じて積極的に貢献することが大きな意味を持つのだと思いますが、どんな展開が想定されるのでしょうか。

高階 日本は長く、外からの文化を受け入れ

る経過をたどってきました。古くは中国、朝鮮半島から、明治以降は西欧、そして戦後にはアメリカの文化の影響を強く受けてきました。受容力は存分に蓄えられているんですね。こうして外から吸収したものの栄養にして、また独特の文化を生んできた。

そうした日本の文化を外国から見ても、向こうの論理で解釈したり、批評したりということもずいぶん行われるようになりました。それらには、日本人として気づかなかったことの指摘を受けて、なるほどということがある一面、見当違いだともあります。ともかく、日本がこれだけ経済的に重要な地位を占めるようになると、外国の方でほととくわけには行かなくなる。今までは日本は外から受け入れる一方で、自分のことを説明するということにはあまり慣れていないのですが、外国、特に西欧の人々は論理的説明を重んじますから、理屈を求めます。例えば日本の経済発展についても、ひと昔前には、それは低賃金、ダンピングのせいだということがしきりに言われた。ところが、どうもそうではないらしいということが分かってくると、今度は、禅の影響だとか、武士道精神の発露だなど言われるようになった。時には日本人の「カミカゼ精神」が経済活動にも現れてきているといったような危険な解釈さえ出てきています。

こんな関係を見ても、受け身であるだけでなく、日本としても日本文化の特質を充分に考えて、その独特の文化を積極的に世界に打ち出していくてはどうか、ということが当然考えられると思います。それが、世界のお役に立つことになりましようし、さらに進んで外国の文化について、日本の文化として出来るお手伝いをしていく。

——外国が日本の文化に注目して、それが外国に役立っている例には、どんなことがあるのでしょうか。

高階 家族的な経営というのなど、その一つでしょう。仕事と家庭は別々、と考えるのが普通だったのに、日本のやり方を見て、仕事も休養も家族と一緒にできるのは、いいことじゃないか、と思うようになって、取り入れた。例えばドイツなどではそれで成功している例がある。まあ、生活的な例ですが。

——いわゆる「文化」のことで、例を示していた……。

高階 そうですね。西洋人は直線を引く場合には定規を使い、曲線はコンパスで描く。つまり直線と曲線ははっきり区別された別のものだと考える。それに対して日本では筆で思うままの線を引く、直線でも、曲線でも……。そこに特色があった。実際に大工さんたちは縄を使って、直線を引いたり、少しわため

曲線を出したり、思うままにやっています。

屋根のひさしの線とか、日本刀の反りなどに直線と曲線の中間にあるような微妙な感覚がよくうかがわれます。こういう自在さを示していくのなど、一例になるでしょう。おもしろいことに、二十世紀の抽象美術でも、日本の場合、モンドリアンのような完全に幾何学的抽象絵画は非常に少ない。円や四角を描いても微妙なふくらみとか、ぶれが見られる。それが日本の美意識の特色でしょう。この点は、近ごろのフアジーにも通ずることだと思います。

美術館や博物館の充実を

——例えば、そうしたことを積極的に示していくのが、提言で言う「文化の発信」ということになるのです。

高階 一例に過ぎませんが、「文化の発信」ということでいえば、国内でも考えたいことがたくさんあります。美術館や博物館、図書館といったところは、文化遺産を蓄積しています。そこで公開されているものについて、人々が利用するだけでなく、それらの研究機能を強化し、生かして、文化に関するソフトを生み出していく。それらの施設が文化の情報センターの役割を担って、広く発信していく。

そうしたソフトを海外に送りだしていくようになることも、国際社会への積極的な貢献になると思います。外国にはいくらか例のあることです。

例えばパリの国立近代美術館には、美術図書資料室があつて、学芸員とは別に、専門の職員が二十人ほどいます。われわれでも行けばすぐ写真やカタログなど参照できる。ところが日本の美術館では、学芸員が片手間に資料整理をしている程度で、公開の資料室や専門の資料係を持っているところはほとんどないという実状です。だから外国から問い合わせがあつても適切に対応できない。ものだけでなく、文化のソフトの蓄積と公開のための施設と人員の充実が、これからは求められるということです。

地味なことにも目を向けて

——企業メセナ協議会が生まれるなど、財界に文化振興の気運が盛り上がりつつあるといえます。メセナとは何か、仏和辞典を引くと文芸の擁護、学術の後援などと出てきて、なるほどと思うわけですが。何にしてもお金を出せるところが、その気になることは、いいことです。もし、財界に注文を出すとしたら、ど

んなことでしょうか。

高階 企業は仕事をして、収益を上げるのが第一であることは言うまでもありません。同時に社会的存在として、それぞれ独自の立場を主張するものでもあるのでしょうか。その意味で、メセナ活動に乗り出されたことは、大いに結構なことです。

そこで、あえて申すなら、文化には、派手なことの一方、地味な面もあるということです。その点を含んで、地味なことにも、ぜひ目を向けて頂きたいと思います。

——冠つきのイベント活動ばかりを追うのではなく、ということでしょうか。その意味でも、芸術文化振興基金の今後の活動が注目されます。どう活用していけばいいでしょうか。

高階 当面は、広く薄く分ける、ということでもいいでしょう。やむを得ないと思います。その効用をみんなが知るのも、この種のことを進めていくには、大切なことです。政府の出資ということは、国民の税金です。広範な理解がなければなりません。国民みんなが、その気になるようになりたいものです。

将来は、ある意図によって、重点的に配分をしていくことがあっていいでしょう。何にしても、資金の額がもっと大きくならないとね。ざっとのことですが、今の十倍は欲しいところです。

編集後記

今月は、文化政策推進会議から文化庁長官に対して、先月、緊急提言が提出されたことを踏まえ、文化振興の今日的課題について特集した。

文化庁では、本緊急提言を踏まえ、平成四年度の概算要求と税制改正要望事項をまとめ、財政当局に提出したところである。九月からは、この概算要求と税制改正要望をめぐって、さしずめ「秋の陣」とでもいうべき財政当局との折衝が開始されることとなるが、予算の獲得はもちろんのこと、税制改正の実現についても、関係者の力強い支援、働きかけが不可欠であり、皆様の一層の御理解、御支援をお願いする次第である。

(Y)

「文化庁月報」八月号

(通巻第二七五号)

平成3年8月25日印刷・発行

編集 文化庁

〒100 東京都千代田区霞が関3丁目2番2号

発行所 株式会社 きょうせい

本社 千代田区中央区銀座7丁目4番12号

営業所 千代田区新富区西五軒町4丁目2

電話 (03) 32681241 (代表)

振替口座 東京 91161番

印刷所 (株)行政学会印刷所

定期購読のおしらせ

本誌のご購読のお申し込みは、直接弊社の本・支社、あるいは最寄りの書店へお申し込みください。

定価 190円(本体184円) (送料四六円) 年間購読料 1,280円(税込・送料共)

広告の問合せ・申込み先

株式会社 きょうせい 営業第二課・宣伝係
☎ (03) 3269-4145 (ダイヤルイン)